

中間報告書（平成 23 年度）

提出者 平田 知久

提出年月日 2012 年 3 月 31 日

【プロジェクト名】

和文

メディア空間と親密圏/公共圏に関する理論的研究: アジアとヨーロッパの比較研究の試み

英文

Theoretical Research on Media-Spaces and Intimate/Public Spheres: Comparative Studies between Asia and Europe

【メンバー構成】

研究代表者

富永茂樹（京都大学 人文科学研究所・教授）

幹事

平田知久（京都大学 大学院文学研究科・研究員（グローバル COE））

メンバー

吉田純（京都大学 高等教育推進開発センター・教授）

鶴飼大介（京都大学 大学院人間・環境学研究科・助教）

西川純司（京都大学 大学院文学研究科・日本学術振興会特別研究員（DC2））

石井和也（京都大学 大学院文学研究科・博士後期課程）

溝口佑爾（京都大学 大学院人間・環境学研究科・日本学術振興会特別研究員（DC1））

【ねらいと目的】（600 字程度）

西洋近代における公共圏の形成と、書物をはじめとする手紙や新聞（そして、それを支える鉄道などの大量輸送システム）といった「メディア」の展開は、相即不離な関係にある。他方で、例えば「母から子どもへの読み聞かせ」や「家庭内言語教育」といったものに明らかのように、メディアは西洋近代の親密圏の形成の重要なファクターを担っている（ex. Kittler, F., 1985, *Aufschreibesysteme 1800/1900*）。このようなメディア空間を中心として親密圏と公共圏の双方を同時に考察するという研究視座は、考察領域が多岐にわたることもあってか、これまであまり採られてこなかった。本プロジェクトでは、西洋におけるメディア（空間）の文化社会的検討において蓄積されてきた先行研究を踏まえつつ、近代のメディア空間において出来た親密圏と公共圏のあり方を明らかにし、アジアとの比較研究へと接続したい。

【活動の記録】

研究会・ワークショップの場合は、開催年月日、報告者と報告題等

調査の場合は、調査年月日、調査者、調査地、調査目的等

その他の活動も含めて、研究期間中の活動について簡潔に記してください。

1. 研究報告など

- i. 理論班第13回定例研究会・日本社会情報学会（JSIS）関西地区研究会（2011年5月14日）
報告タイトル:「フィルタリング再考」
報告者:
伊藤賢一（群馬大学 社会情報学部 准教授）
渋井哲也（フリーライター）
竹宮恵子（漫画家、京都精華大学 マンガ学部 教授）
- ii. 理論班第14回定例研究会（2011年5月27日）
報告タイトル:「主婦の衛生実践と窓ガラス——1920-30年代日本の住宅言説における「明るさ」をめぐって」
報告者: 西川純司（京都大学 大学院文学研究科・日本学術振興会特別研究員）
- iii. 理論班第15回定例研究会（2011年7月8日）
報告タイトル:「歓待」についてのノート——断片的考察
報告者: 平田知久（京都大学 文学研究科グローバル COE 研究員）

2. 研究会参加など

- iv. 日本社会情報学会（JSIS）関東地区研究会・日本社会情報学会若手支援部会会議（東京 2012年2月19日）
参加者: 平田知久（京都大学 文学研究科グローバル COE 研究員）

3. その他の活動

- v. 日本社会情報学会（JSIS-BJK）災害情報支援チームによる「思い出サルベージアルバム・オンライン」への参加
参加者: 溝口佑爾（京都大学 大学院人間・環境学研究科・日本学術振興会特別研究員（DC1））

4. 出版など

- vi. 吉見俊哉, 2012, 「〈公共圏〉としての大学」 GCOE 理論研究班編『歴史概念としての〈公共圏〉と〈公共哲学〉——リベラル・モデルとは異なる公共性の別様の理解をめざして——』 pp. 74-87.

【成果の概要】（800字程度）

本コアプロジェクトは、「メディア空間」において成立する／してきた親密圏・公共圏を様々な角度から問い直すことを主眼とするものである。2011年度は、上記報告者／調査者の個人研究をもとにして、メディア空間と親密圏・公共圏にかかわる様々な論点を共有することを試みた。

まず、iでは「フィルタリング」を主題として、現在・未来の社会構想について、社会情報学を専門とする研究者、情報化社会に生きる子どもを取材するルポライター、表現者でありかつ規制の対象とされる可能性のある漫画家という3つの立場から、それぞれの意見を交換することを試みた。また、iiにおいては、1920-30年代日本における「明るさ」と「衛生」という概念の結びつきについて、特に住宅のあり方をめぐる言説の分析が行われた。さらに、iiiでは、これまで論じられてきた「歓待」に関する思想史的考察を踏まえた上で、それをメディア論的にどのように活かすのかについて議論が行われた。

他方、今年度は個々にいくつかの実践的な活動も行っており、例えば iv は、2012年度に開催される社会情報学会（日本社会情報学会が統合されて設立される新学会）大会における若手研究者のための英語ワークショップ開設に向けての会議へ参加、v は東日本大震災の被災地で、洪水によって流された写真をデータ化して保存するプロジェクトへの参加などである。

最後に、理論研究班のもう一つのコアプロジェクトである「歴史概念としての親密圏・公共圏の理論的検討」が中核となって出版した研究論集『歴史概念としての〈公共圏〉と〈公共哲学〉——リベラル・モデルとは異なる公共性の別様の理解をめざして——』の中でも、特に vi の報告は、〈公共圏〉としての大

学を考えることは、「〈メディア〉としての大学」を考えることでもあるということ、西洋における大学の歴史から考える試みであるという点で、本プロジェクトの成果の一つとして付記しておく。

【通信欄】

(事務局記入欄)

プロジェクト	<input type="checkbox"/> 次世代	<input type="checkbox"/> 次世代ユニット	<input type="checkbox"/> 男女共同参画に資する調査研究
経費	予算額	(千円)	実績額